律における罪の分類方法

—— 身体／言葉／心 ——

生 野 昌 範

(大 阪 大 学)

0 はじめに。 律には罪が規定されており、その罪を分類する方法も種々に記述されている。例えば、「重罪／軽罪」、「粗悪な罪／粗悪でない罪」という分類方法などである。そして、身体／言葉／心に関して分類分けする方法も罪の分類方法の一つとして述べられているので、以下ではその分類方法に関して Vinayavastu, パーリ律, 漢訳律文献の順に見ていきたい。

1 Vinayavastu. まず, Vinayavastu は, 身体／言葉／心に関する罪のカテゴリを五つ列挙した [Adhik-v 74.13-15] 後に, その五つのカテゴリに関して次のように説明する [Adhik-v 74.16-75.17, cf. P Āe 220 b5-221a4, D Ga 232b1-233a2]。

(1) 身体に関するものであって (kāyiki), 言葉に関せず (na vāciki), 心に関しない (na caitasiki) 罪とはどれか? 以下のよう
に, 出家していず具足戒を受けていない家長たちの下で「出家したが具足戒を受けていない家長たちである」と比丘が [思って] 寢床を整える。そして [比丘が] 眠っている時にその彼に向かって女性が [手足を] 払¹⁾ けて横になる, あるいは [比丘が] 眠っている時に [彼が]

大きな寝具へ上げられる。これが、身体に関するものであって、言葉に関せず、心に関しない罪である。

(2) 言葉に関するものであって、身体に関せず、心に関しない罪とはどれか？ 以下のように、比丘が女性に五つの語を用いて教えを示して、意図的にではなく (asaṃcintya) 六番目の語へ越え進む、あるいは六つの語を用いて [教えを] 示して七番目の語へ越え進む。これが、言葉に関するものであって、身体に関せず、心に関しない罪である。

(3) 身体に関し、かつ心に関するものであって、言葉に関しない罪とはどれか？ 以下のように、比丘が意図的に畜生を命から引き離しつつ、次のようには言わない：「そのように生物は命から引き離されるべきである。[生物が] 私によって [命から] 引き離されたように、そのようにまた [生物が命から] 引き離されるべきである。[命から] 引き離された [生物] は、よく引き離されたものとなる」と。与えられていないものを取りつつ、諸々の欲望の対象に対して誤った仕方で行ないつつ、酔うことになる飲物を飲みつつ、次のようには言わない：「そのように酔うことになる飲物が飲まれるべきである。そして、[酔うことになる飲物が] 私によって飲まれたように、そのようにまた酔うことになる飲物が飲まれるべきである。飲まれた [酔うことになる飲物] はよく飲まれたものとなる」と。これが、身体に関し、かつ心に関するものであって、言葉に関しない罪である。

(4) 言葉に関し、かつ心に関するものであって、身体に関しない罪とはどれか？ 以下のように、比丘が女性に五つの語を用いて教えを示して、意図的に (saṃcintya) 六番目の語へ越え進む、あるいは六つの語を用いて [教えを] 示して七番目の語へ越え進む。これが、

言葉に関し、かつ心に関するものであって、身体に関しない罪である。
(5) 身体に関し、かつ言葉に関し、かつ心に関する罪とはどれか？
以下のように、比丘が意図的に畜生を命から引き離しつつ、次のように言う：「そのように生物は命から引き離されるべきである。そして、[生物が] 私によって [命から] 引き離されたように、そのようにまた [生物が命から] 引き離されるべきである。²⁾ [命から] 引き離された [生物] は、よく引き離されたものとなる³⁾」と。与えられていないものを取りつつ、諸々の欲望の対象に対して誤った仕方で行ないつつ、酔うことになる飲物を飲みつつ、次のように言う：「そのように酔うことになる飲物が飲まれるべきである。そして、[酔うことになる飲物が] 私によって飲まれたように、そのようにまた酔うことになる飲物が飲まれるべきである。⁴⁾ 飲まれた [酔うことになる飲物] はよく飲まれたものとなる」と。これが、身体に関し、かつ言葉に関し、かつ心に関する罪である。

ここでは、身体／言葉／心に関する罪の五つのカテゴリが、具体的な事例を伴って列挙されている。この分類方法に関してまず注目すべき点は、心だけに関連した罪というカテゴリが存在しないということである。また、カテゴリの(2)と(4)、(3)、(5)の事例に着目すると、「心に関する (caitasikī)」というのは、ある違反行為を「意図的に (saṃcintya)」行なうことであるということが読み取れる。

次に、列挙されている事例がそれぞれどのような規定に抵触するのを見たい。⁵⁾ (1)における「比丘が寝床を整える。そして [比丘が] 眠っている時にその彼に向かって女性が [手足を] 払って横になる」ことと「[比丘が] 眠っている時に [彼が] 大きな寝具へ上げられる」という二つ⁶⁾の事例は、女性と同一の部屋において寝床を準備することを禁ずる Pāya-

ntikā 65 [Erg.L.Ch. 7.1f.] と大きな寝具の上に座ることを禁ずる Car-mavastu [GilMs III 4.195.11f.] の規定にそれぞれ抵触すると見なしうる。次に、(2)と(4)における事例は、女性に五・六語を越えて教えを示すことを禁ずる Pāyantikā 5 [PrMoSū(Mū) 32.9f.] に抵触する。続いて、(3)と(5)における事例は、畜生を意図的に殺すことを禁ずる Pāyantikā 61 [cf. PrMoSū(Mū) 41.7f.], 盗みを禁ずる Pārājika 2 [PrMoSū(Mū) 14.7ff., Erg.L.Ch. 2.6ff. Cf. KaVā(Mū) 68.2-8], 飲酒することを禁ずる Pāyanti-kā 79 [Erg.L.Ch. 9.11] に抵触する⁷⁾。

以上のことから明らかかなように、カテゴリの(2)と(4)、及び(3)と(5)の事例は、それぞれプラティモークシャ・スートラの同一の条項に抵触する違反行為である。このことは、プラティモークシャ・スートラの条項が「身体／言葉／心」に関する五つのカテゴリの内のただ一つに分類されるのではなく、複数のカテゴリに分類されうることを示唆している [cf. 2]。

2 パーリ律。 次に、パーリ律における身体／言葉／心に関する分類方法の記述 [Vin II 90,30-35, cf. Vin V 92,10-16] を見てみたい。

- (1) 罪が身体から生起し、言葉や心から生起しないことがある。
- (2) 罪が言葉から生起し、身体や心から生起しないことがある。
- (3) 罪が身体と言葉から生起し、心から生起しないことがある。
- (4) 罪が身体と心から生起し、言葉から生起しないことがある。
- (5) 罪が言葉と心から生起し、身体から生起しないことがある。
- (6) 罪が身体と言葉と心から生起することがある。

パーリ律では、以上の六つのカテゴリが立てられている。その内、Vina-yavastu との相違点は、「身体と言葉から生起し、心から生起しない」罪

というカテゴリ(3)が存在するということである。

パーリ律は、プラティモークシャ・スートラの各条項全てが六つのカテゴリの内のどれとどれに分類されるのかを Vin V 1-32 (比丘)；54-70 (比丘尼) において詳説している。その説明の中で、上に見た Vinayavastu の事例に対応する条項に関する説明のみを見てみたい。⁸⁾

Vinayavastu の(1)の事例が抵触する Pāyantikā 65 には、パーリ律では Pācittiya 6 が対応する。そして Pācittiya 6 は「羊毛の [ニッサギヤ・パーチャッティヤ]」と同様の罪に分類されている [Vin V 14,11-15] ので、「身体から生起し、言葉や心から生起しない」罪(1)か、「身体と心から生起し、言葉から生起しない」罪(4)に該当する [cf. Vin V 10,35-11,3]。

次に、Vinayavastu の(2)と(4)の事例が抵触する Pāyantikā 5 には、パーリ律では Pācittiya 7 が対応する。そして Pācittiya 7 は「単語ごとに教え [を語らせる比丘のパーチャッティヤ]」と同様の罪に分類されている [Vin V 14,16-22] ので、「言葉から生起し、身体や心から生起しない」罪(2)か、「言葉と心から生起し、身体から生起しない」罪(5)に該当する [cf. Vin V 13,35-14,3]。

続いて、Vinayavastu の(3)と(5)の事例が抵触する Pāyantikā 61 と Pārājikā 2, Pāyantikā 79 には、パーリ律では Pācittiya 61, Pārājika 2, Pācittiya 51 が対応する。その内、Pācittiya 61 と Pārājika 2 は、「身体と心から生起し、言葉から生起しない」罪(4)か、「言葉と心から生起し、身体から生起しない」罪(5)か、「身体と言葉と心から生起する」罪(6)に該当する [Vin V 22,22-25 (cf. 4,3-4,8); 3,31-4,2]。一方、Pācittiya 51 は、「身体から生起し、言葉や心から生起しない」罪(1)か、「身体と心から生起し、言葉から生起しない」罪(4)に該当する [Vin V 21,5-9]。

これらの内 Pācittiya 6,7,51 から、同一の罪であっても「心」から生起

する場合としない場合とがあることがわかる。

次に、パーリ律を Vinayavastu と比較してみたいが、ここで注意しなければならないのは Vinayavastu とパーリ律とでは記述方式が異なるということである。つまり、Vinayavastu は、パーリ律と異なり、各条項の五つのカテゴリ全てへの分類分けを記述しているのではないので、Vinayavastu においてパーリ律に対応する記述がないということがパーリ律との相違点であるとは断定しえないのである。そのことに留意した上で、パーリ律と Vinayavastu との相違点として、少なくともパーリ律が飲酒戒 (Pācittiya 51) を「身体と言葉と心から生起する」罪というカテゴリに分類していないということを指摘しうる。

3 漢訳律文献。 次いで、漢訳律文献における身体／言葉／心に関する罪の分類方法の記述を見てみたい。

まず、東晉佛跋陀羅共法顯譯『摩訶僧祇律』卷三十三 [T 22, 496b25-28] は、以下のように記述している。

罪 法 者，(1) 身 行 (2) 口 行 (3) 身 口 行。(1') 身 不 攝 故 犯，(2') 口 不 攝 故 犯，(3') 身 口 不 攝 故 犯。(1'') 身 作 (2'') 口 作 (3'') 身 口 作。是 名 罪 法。① 治 罪 for 罪【麗】。【宮】により訂正。

② 有 for 身【大】。【宮】【聖】【麗】により訂正。

『摩訶僧祇律』は以上のカテゴリを述べているが、「心」に関連付けられたカテゴリは一つもないということが大きな特徴である。『摩訶僧祇律』は、身体／言葉の二つの要素のみによって罪を分類している。

次に、後秦弗若多羅共羅什譯『十誦律』卷三十五 [T 23, 251b29-c3] は、以下のように記述している。

(1) 有犯身作非口非心作。(2) 有犯口作非身非心作。(3) 有犯身作心作非口作。(4) 有犯口作心作非身作。(5) 有犯身作口作心作。無但心犯。『十誦律』におけるこの五つのカテゴリは、項目の数・内容ともに Vinayavastu におけるカテゴリと同一である。また、『十誦律』は「心」のみによる罪が存在しないということを明言している。

続いて、姚秦佛陀耶舍共竺佛念等譯『四分律』卷六十 [T 22, 1009a4-8] は、以下のように記述している。

有六犯所起處。(1) 或有犯由身起非心口。(2) 或有犯起於口不以身心。(3) 或有犯從身口起不以心。(4) 或有犯從身心起非口。(5) 或有犯起口心非身。(6) 或有犯從身口心起。是為六。

『四分律』におけるこの六つのカテゴリは、項目の数・内容ともにパーリ律におけるカテゴリと同一である。

次に、律聖典に対する論書である『毘尼母經』を見てみたい。失譯『毘尼母經』卷八は、まず次のように記述する [T 24, 848b14-17]。

(1) 有犯因身起非心口。(2) 有犯因口非身心。(3) 有犯因心非身口。(4) 有犯因身心起。(5) 有犯因心口起。(6) 有犯因身口心起。

『毘尼母經』におけるこの六つのカテゴリは、項目数が六であるという点ではパーリ律、及び『四分律』と同一である。しかし、項目内容に関してはパーリ律、及び『四分律』とは異なっている。その相違点は『毘尼母經』にはパーリ律と『四分律』に存在しない「心」のみによる犯罪(3)が存在する代わりに、パーリ律と『四分律』に存在する「身体と言葉」による犯罪が存在しないという点である。

また一方、『毘尼母經』は、これに続く箇所 [T 24, 848b19-c4] で具体的な事例を伴って身体／言葉／心に関する罪のカテゴリを記述している。ところが、その箇所における罪のカテゴリは、前出のカテゴリとは異なり、

「(i) 有犯因身非心口者……。 (ii) 従口所起犯者……。 (iii) 従身口所起犯者……。 (iv) 因心所起犯者……。 (v) 身心所起犯者……。 (vi) 従身口心所起犯者……」となっている。このカテゴリを前出のカテゴリと比較すると、相違点が二つ存在する。それは、まず両者の順番が異なることであり、次に後出のカテゴリには前出の「心と言葉」による犯罪というカテゴリ(5)が存在しない代わりに「身体と言葉」による犯罪というカテゴリ(iii)が存在するということである。

『毘尼母經』にはこのような問題点があり理解するのが困難ではあるが、ここでは「心」のみによる犯罪に注目してみたい。後出のカテゴリ(iv)「因心所起犯」の事例として二つの具体例が記述されているが、その内の一つの事例は「如比丘見他所犯覆藏不向人發露。是為心犯」[T 24, 848c2-3]⁹⁾である。一方、この事例にはパーリ律ではPācittiya 第64条¹⁰⁾が対応するが、Pācittiya 第64条は「身体と言葉と心から生起する」[Vin V 23,3f.]¹¹⁾と説明されている。

『毘尼母經』とパーリ律とでは文言に関して内容的な相違は見られないにもかかわらず、それに対する違反行為を『毘尼母經』は「心」のみによる罪とし、パーリ律は「身体と言葉と心」による罪としている。このことが意味することは、『毘尼母經』が「心」のみによる独自の罪を規定しているのではなく、『毘尼母經』とパーリ律とでは同様の違反行為に対して身体／言葉／心の内の何から生起するののかという認識を異にしているということである。

次に、同じく律聖典に対する論書である『律二十二明了論』を見てみたい。陳真諦譯『律二十二明了論』は、「八縁起所生罪」として次のように記述している [T 24, 666b19-c1]¹²⁾。

罪生起因有八種。(1) 一有罪従身生不従口意生，如不閉戸共非大戒眠

等。(2) 二有從口生不從身意生，如善心為女人說法過五六語等。(3) 三有從意生不從身口生，如心地諸罪。(4) 四有從身口生不從意生，如善心為男女行姪使等。(5) 五有從身意生不從口生，如故心出不淨等。(6) 六有從口意生不從身生，如染汚心對女人說顯示姪欲語等。(7) 七有從身口意生，如有染汚心為男女行姪使等。(8) 八有不從身口意生，如先對人說大妄^①語，彼人不解，此人已對治三方便，後時彼人若追解其語，此人即得波羅夷罪。 ① 妾【麗】。【宋】【元】【宮】【金】により訂正。

『律二十二明了論』は、罪の分類方法として、以上の八つのカテゴリを立てている。カテゴリの項目に関して、まず(3)において『毘尼母經』と同じく「意思¹³⁾から生じる」罪というカテゴリが存在する¹⁴⁾。次いで、(5)の「身体と意思から生じる」罪において、「意思から生じる」とは「故心」に違反行為を行なうことである。しかし、(4)と(7)に注目すると、同一の違反行為であるにもかかわらず、「善心」によって行なわれたのであれば「意思から生じない」罪に分類され、「染汚心」によって行なわれたのであれば「意思から生じる」罪に分類¹⁵⁾されている。つまり、この(4)と(7)において「意思から生じる」罪という分類基準は、違反行為を「故心」に行なうか否かではなく、「染汚心」によって行なうか否かである。このように、『律二十二明了論』には、「意思から生じる」ということに関して「故心」という基準と「染汚心」という基準の二つが並存している。また、『律二十二明了論』の(2)と Vinayavastu の(2)のカテゴリは同一の項目と違反行為の事例を述べているが、『律二十二明了論』は「善心」によってその違反行為を行なうと述べているのに対して、Vinayavastu は「意図的ではなく (asaṃcintya)」違反行為を行なうと述べている。ここにおいて、「意・心」から生じる罪の基準が両文献において異なっているということを明瞭に読み取ることができる。さらに、(8)において「身体と口と意思か

ら生じない罪」という他の律には見られないカテゴリが立てられている。⁽¹⁶⁾

4 まとめ。 罪を身体／言葉／心によって分類する方法は、律文献それぞれにより異なっている。その相違が顕著なものとして「心」のみから生じる罪がある。「心」のみから生じる罪は、現存する資料では律の論書にのみカテゴリとして立てられている。そして、『毘尼母經』は「心」のみから生じる罪を述べているが、罪が身体／言葉／心の内の何から生起するのかという認識を他の律と異にしているだけである。また、「心から生じる」という基準は、Vinayavastuでは「意図的に」のみであるが、『律二十二明了論』では「故心」と「染汚心」という二つの基準が並存している。さらに、『律二十二明了論』だけが、「身体と言葉と心」から生じない罪という独自のカテゴリを立てている。なお、『摩訶僧祇律』だけは、身体／言葉のみによって罪を分類している。

略号

Adhik-v, Śay-v : *The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu*, ed. R. GNOLI, Roma 1978.

BhīKaVā(M.Sch.): M. SCHMIDT, “Bhikṣuṇī-Karmavācānā: Die Handschrift Sansk. c. 25(R) der Bodleian Library Oxford,” in, *Studien zur Indologie und Buddhismuskunde*, Bonn 1993, pp. 239-288.

Dhsk : *Fragment des Dharmaskandha: Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit*, ed. S. DIETZ, Göttingen 1984.

Erg.L.Ch. : LOKESH CHANDRA, “Unpublished Gilgit Fragment of the Prātimokṣa-Sūtra,” WZKSO 4 (1960), pp. 1-11.

GilMs: *Gilgit Manuscripts*, ed. N. DUTT, Vol. III. 4, Delhi ² 1984.

Mvy: *A New Critical Edition of the Mahāvīyutpatti: Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary of Buddhist Terminology*: 新訂翻訳名義大集, 石濱裕美子, 福田洋一, 東京: 東洋文庫 1989.

PrMoSū(Mū), KaVā(Mū): A. Ch. BANERJEE, *Two Buddhist Vinaya Texts in Sanskrit: Prātimokṣa Sūtra and Bhikṣukarmavākya*, Calcutta 1977.

Upj: *Upasamṣpadājñaptiḥ* (Critically Edited with Notes and Introduction), ed. B. JINANANDA, Patna 1961.

パーリ文献の略号は H. SMITH, *A Critical Pāli Dictionary, Epilegomena to Vol. I*, Copenhagen 1948 に準拠し, PTS 版を使用した。チベット訳に関しては, P: Peking 版, D: sDe dge 版。漢訳に関しては, T: 『大正新脩大藏經』, Z: 『卍續藏經』。

註

- 1) *suptam cainam mātṛgrāmo viṣete*. Göttingen 大学の K. WILLE 博士のご厚意によりこの箇所(337r7)の写本を確認することができたが、写本もこの通りである。*suptam enam* は Akk. des Ziels と解した(もしくは、Bedingungsakkusativ か) [cf. T. GOTŌ, “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbuns — anhand des Altindoarischen —,” in, *Indogermanische Syntax — Fragen und Perspektiven —*, Wiesbaden 2002, p. 37f. (p. 29f.)]。あるいは、Gilgit/Bamiyan-Typ II における vi と dhi の文字の類似性を鑑みるならば、*mātṛgrāmo dhiṣete* の誤写である可能性も考慮される。チベット訳は「その [比丘] が眠っていて、女性が横になる (de gñid log pa dañ | bud med ñal ba)」[P 220b6, D 232b2]。
- 2) (3)及びチベット訳に基づいて、*vyaparopayitavyaḥ* を挿入した。
- 3) 直後の *supītam bhavatīti* 及び(3)に基づき、*bhaviṣyatīti* を *bhavatīti* とし

た。

- 4) (3)及びチベット訳に基づいて、〈madyapānaṃ pātavyam〉を挿入した。
- 5) ギルギット写本中にはシリアル番号2と3、4に、プラティモークシヤ・ストラの断簡が残存する。そして、そのどれもがデジタル・データとして近年出版された [『法華経関係稀観資料集成データベース：立正大学法華経文化研究所蔵マイクロフィルム資料』東京：立正大学法華経文化研究所2003]。学会発表の際には、それを用いて関連箇所再校訂を行なったが、今は紙幅の都合上割愛する。
- 6) 「具足戒を受けていない家長たちであると[思っ]て寝床を整える」ことは、Pāyantikā 第54条に関連する。しかし、Pāyantikā 第54条は「さらに、比丘が具足していない人(男)と共に二夜を越えて同一の部屋における寝床を整えるならば、パーヤンティカーである」[PrMoSū(Mū)38.1f.; Erg.L.Ch. 5.17f.] と規定しているので、「二夜を越え」ないならば罪ではない。さらに、Vinayavastu は(1)の事例を「心に関しない罪」として挙げているので、この事例は「意図的にでなく」行なわれた違反行為の事例であると考えられる。そこで、比丘が「眠っている (supta-)」と形容されている二つの事例のみが罪に相当すると見なした。二つの事例のみが選択的に提示されていることは、vāの使用による二つの事例の接続とチベット訳からも確かめられる。
- 7) 「諸々の欲望の対象に対して誤った仕方で行ないつつ (kāmeṣu mithyā caran)」という事例は、Pārājikā 1 [PrMoSū(Mū) 14.4ff. Cf. KaVā(Mū) 67.8-12] に関連すると考えられる。しかし、文言そのものはPārājikā 1における文言ではなく、五戒における文言に等しい [KaVā(Mū) 59.5-12; Upj 7.3-11; Dhsk 74.4-13; Mvy 1695; BhīKaVā(M.Sch.) 249.7-19, cf. Śay-v 74.4-8]。
- 8) なお、パーリ文献内部における罪の分類方法の考察に関しては、O. VON HINÜBER, “The Arising of an Offence: āpattisamuṭṭhāna,” JPTS 16 (1992), pp. 55-69を参照のこと。
- 9) 「因心所起犯」のもう一つの事例 [T 24, 838b28-c1] は、尼薩耆波逸提に違反して得られた金銀の処理を巡って浄人に対して告知する方法に関連している。パーリ律にも同様の記述 [Vin III 238,4-17] があるが、Nissaggiya-Pācittiya そのものが規定している違反行為ではないためパーリ律がその違反行為をどのカテゴリに属すると見なしているのかは明らかでない。
- 10) 「さて、比丘が[他の]比丘の粗悪な罪を知っていながら隠すならば、パーチャティヤである」[Vin IV 127,29f.**].
Cf. 「粗悪な罪というのは四パーラージカと十三サンガーディセーサであり」

[Vin IV 128,1f.], 「粗悪でない罪を隠す, [その場合] ドウッカタ罪である」
[Vin IV 128,9f.]

- 11) Sp は、パーリ律と同様に、Pācittiya 第64条が「身体と言葉と心から生起する」[Sp 866,33] と記述するが、『善見毘婆沙』卷十六は「身体と心によって生起する」とする [T 24, 785c10, cf. 『四分律疏』卷八, Z 1.65.3, 295a4-7 ≈ 『四分戒本疏』卷三, T 85, 595a8f.]。なお、Sp は「不作為」による罪であると説明している。
- 12) 京都大学人文科学研究所共同研究班「真諦三藏とその時代(班長: 船山徹)」における2008年5月9日の研究班にて『律二十二明了論』における当該箇所を訳注を担当した。その際、榎本文雄教授、船山徹准教授、古勝隆一准教授にご教示いただいた。
- 13) 「從意生」罪の事例として「心地諸罪」が述べられているので、ここでの「意」は「心」と異なるものではないと解した。また、真諦訳の「意」に対応するサンスクリット語として citta-, cetanā- も挙げられている [平川彰他『俱舍論索引』第二部, 大蔵出版, 1977, s. v. 意 (, 作殺~)]。さらに、『攝大乘論釋』卷一における真諦訳の増広部分と見なしうる箇所において、『律二十二明了論』と順番は異なるが、同様の八つの「縁起」が述べられており [T 31, 154c11-16], そこでは「意」ではなく「心」と漢訳されている(『攝大乘論釋』の情報、龍谷大学大学院生の池田將則氏の教示による)。
- 14) Cf. 賓作『四分律疏飾宗義記』卷三本 [Z 1.66.1, 44b11f.]: 「三從意生不從身口, 如心地說罪蓋謂決意擬煞等得吉羅」。殺そうなどと決意すれば突吉羅であるということが、割注で例示されている。さらに『五分律』は身体/言葉/心による分類方法を記述していないが、「若比丘作是念, 我當殺彼人, 發心時突吉羅」[卷二, T 22, 9a6f.] と述べていることは注意されるべきである。『律二十二明了論』における「意」のみから生じる罪というこのカテゴリは、今後さらに検討されるべき必要がある。なお、『明了疏』の佚文における「如欲犯姪, 已起決心, 身口未動。此犯吉羅, 責心懺滅」[Z 1.66.1, 55a15f.] も参照のこと。
- 15) カテゴリ(4)と(7)の事例は、同一の規定(パーリ律では Saṃghādisesa 5)に抵触するが「八縁起所生罪」における別々のカテゴリに該当する。『律二十二明了論』における「有罪由罪同不由縁起同」[T 24, 668c4] は、このことを意図していると考えられる。
- 16) この箇所に対する『明了疏』の佚文が、『四分律疏飾宗義記』卷三本に現存している [Z 1.66.1, 44b17-c4]。さらに、卷十末の記述 [Z 1.66.2, 309b13-c4] も参照のこと。